## 読むメッセージ ――イエスとの出会い―― ⑧　　BY 関真士牧師

「エゴ　エイミー　閉じた心への自己啓示」

　それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群集を解散させておられた。それから、群集に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとのおつもりであった。しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声をあげた。というのは、みなイエスを見ておびえてしまったからである。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。

マルコ福音書 6 章 45 節～52 節

3 つの不可解なこと

　この物語の最後のことばは「その心は堅く閉じていたからである。」です。堅く閉じていた心が開きました、という結末ではないのです。
　弟子たちは、この直前に起こった二匹の魚と五つのパンの奇跡を目の当たりにしながらも「心を堅く閉じている」のです。とても不可解です。この事も含めて、この記事には少なくとも三つの不可解なことがあります。二つ目は、イエスが弟子たちを「強いて舟に乗せた」ことです。三つ目は、イエスが弟子たちの「そばを通り過ぎようとした」ことです。
　私たちには、とても不可解に見えますが、主のなされる全ての事には意味があります。もし、私たちに不可解と見えるなら、なおさらのこと、そこには特別な深い意味があるに違いありません。今回は、私たちにとっては不可解に見える三つの出来事を通して、主の御心の深みを求めていきましょう。

心を堅く閉ざす弟子たち

　この出来事の直前、弟子たちは、二匹の魚と五つのパンの奇跡を目の当たりにしているのです。しかも、自分たちの手によって男性五千人に食事が配られているのです。自らの手が神の奇跡を経験し、その目で奇跡を見ているのです。それなのになぜ心が堅く閉じているのでしょうか？　心が開かれて、信仰が覚醒するなら分かるのですが、逆なのです。とても不可解です。

私たちにも、そのような事があるでしょうか。神の奇跡を経験しながらも、それでも心が堅く閉じているということが果たしてあるのでしょうか。

少なくとも私には、その経験があります。30 歳の頃、小さな家の教会で礼拝を捧げていました。単立教会で、誰にも経済的な援助を求めることをしなかったので、その日その日が、祈りによって生きるという生活でした。文字通り「落穂拾い」をしに畑に取り残された人参やブロッコーリーを拾いに行ったこともありました。貧乏のどん底でしたが、何度何度も主は奇跡としか言いようのない出来事を起こしてくださって、いつもギリギリでしたが生活が守られました。

その奇跡を証する字数はありませんので割愛しますが、その体験を通して、確かに主は生きておられる！　と信仰が励まされ高揚しました。しかし同時に、幾度となく奇跡を経験しても、自分の心の頑なさは変わらないことにも気づきました。奇跡的に食物が与えれてハレルヤ！と主を賛美したその後に、これが無くなったらどうなるのだろうと不安になっている不信仰な自分がいるのです。心は閉じたままなのです。

その時、40 年間に亘って荒野を放浪したイスラエルの民の事が思い浮かびました。彼らは、毎日のように主の臨在を肉眼で見て、マナをいただいて、数々の奇跡を経験したにも関わらず、彼らの心は頑なままで主に逆らい通しでした（申命記９：６，７）。人は、奇跡を経験することで喜び感動はしても、その肉なる本性は変わらないのです。私は、まさにイスラエルの民と同じだと実感しました。主の奇跡は、恵みであり、もちろんそこにも意味があります。しかし、奇跡で人が変わるのではありません。人が真に変わるのは、悔い改めて十字架と復活の福音を信じ、聖霊によって生きる時だけです。

強いて舟に乗せるイエス

弟子たちは、湖の真ん中で向い風に悩まされ「漕ぎあぐねている」という状況です。湖の真ん中ですから、今さら引き返すこともできない、かといって前にも進まない。気づいたら夜中の３時です。しかもこの状況は、イエスに「強いられて」舟に乗せられたことから始まったのです。彼らの心中は穏やかではなかったと思います。

イエスは、なぜ「強いた」のでしょうか。それは、弟子たちと離れてお一人で祈るためです。しかし、それは同時に、弟子たちにとっても必要なことであったからです。

弟子たちの心は閉ざされていました。それは、イエスご自身に心を閉ざすということです。そこでイエスの乗っていない舟で漕ぎ出すことが、どれほど無力で、絶望的なものであるかということを分からせるために、あえてイエスは「強いられた」のだと思うのです。この弟子たちの漕ぎあぐねている姿は、まさにイエスに心を閉ざした者の歩みそのものを現しています。

「強いられた恵み」ということばがありますが、まさにこのことです。嵐の中の舟で眠っているイエスを起こした時とは違い、この舟にイエスはおられないのです。だからこそ、イエスを求める思いは強くなります。荒療治のように見えますが、イエスは、そこまでして弟子たちに心を開くことを求められたのです。

　それにしてもイエスが「強いる」ということは特別なことです。人格＝神のかたちは尊重されるべきものです。イエスこそ、まさに人格を大切にしてくださるお方です。しかし、もし「強いる」という例外があるとすれば、それは命に関わる緊急時です。極端な話ですが、目の前で命を絶とうとしている人に向かって「あなたの人格を尊重しますからどうぞ」とは言いません。強いて止めようとします。薬物を求めている薬物中毒者に、「あなたの人格を尊重しますからどうぞ」とは言いません。強いて隔離して、一時的に自由を拘束することもあるわけです。
　ここに「強いられた恵み」が与えられたということは、イエスに心を閉ざすということがそれほどに危険で重大なことであるということです。

通り過ぎようするイエス

　イエスは、弟子たちが「漕ぎあぐねているのをご覧になり」、「彼らに近づいて行かれた」のです。ここまでは理解できます。問題は「そのままそばを通り過ぎようとのおつもりであった」ということです。
　なぜイエスは、通り過ぎようとされたのでしょうか？　とても不可解です。しかし、ここにイエスの絶妙な距離感が現わされているのです。イエスは、弟子たちの「そば」を通り過ぎようとされました。あえて遠くではなく「そば」なのです。
　それは、弟子たちの方から心を開いて欲しいということなのです。弟子たちにとって、イエスがおられない舟に乗るということが、どんなに絶望的なことなのかを十分に分かったはずです。だからこそ「そば」を通られるイエスに気づき、イエスに心を開くはずなのです。
　しかし、なんと弟子たちは、イエスがイエスであることに気づけませんでした。むしろ、イエスを「幽霊」だと思い、叫び声をあげて、怯えてしまいました。
　なぜ彼らは、イエスが分からなかったのでしょうか。それは、彼らの中に「ここにイエスが来られるはずがない」という先入観があるからです。まさか夜中の三時にイエスが湖の上を歩いているはずがないのです。
　さて、私たちも同じように「こんな所にイエスが来られるはずがない」と思ってしまうことがあるでしょうか。こんな罪と汚れの満ちた場所に、こんな不信仰な所に、こんな状況なの中に. . . 。私たちの方でそのように決めつけてしまうなら、イエスがそばに来られても分からないでしょう。
　しかしイエスは、その「来られるはずがない所」に来てくださった方なのです。聖なる神の御子が、この世に来られたのです。神のお姿を捨て人間と同じようになられたのです。ゴルゴタの丘の上にまで来られ、墓の中にまでも来られたのです。呪いの十字架、死者が葬られる墓、そこは神がおられるはずがない所です。あり得ない所なのです。しかしイエスは、来られたのです。
　私たちが、こんな所には. . . 、と思えるような所に、そこにこそ主は来てくださるお方なのです。
　そして、今まさに心を堅く閉ざしている弟子たちのそばにも来てくださっているのです。

すべての答え　エゴ　エイミー

　私たちには、不可解に見えることも、それらは全て、イエスを求め、イエスに心を開き、イエスを知るためにあります。
　イエスは、ご自身を幽霊だと思っている弟子たちに、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と語ってくださいました。しかも「すぐに」です。それは、イエスがただ通り過ぎようとされたのではなく、ご自身を現すために「そば」を通られたことを意味しています。
　この「わたしだ」ということばは、ギリシャ語では「エゴ　エイミー」です。このことばは、聖書の中で特別な意味を持っています。
　イエスが十字架にかかる直前の大祭司とのやりとりは、次のように記されています。
　「大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。『あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。』そこでイエスは言われた。『わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。』すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。『これでもまだ、証人が必要でしょうか。』」（マルコ 14：62、63）
　この「わたしは、それです」は、「エゴ　エイミー」です。このことばは、モーセに対して神が語った「わたしはある」と同じ意味なのでです。（出エジプト３：14）
　つまり、イエスの「エゴ　エイミー」は、ご自身を神とする自己啓示なのです。大祭司は、そのことばの意味が分かっているので衣を引き裂いたのです。イエスがご自身を神と等しくされたからです。
　「エゴ　エイミー」とは、聖書にご自身を啓示された神の本質のすべてを現わすことばです。このことばをイエスは、弟子たちに告げたのです。

　そしてイエスは、弟子たちの舟に「乗り込んで」くださったのです。そこで弟子たちの心が開かれてハッピーエンドと思いきや、それでもなお弟子たちの心は堅く閉じたままなのです。パンの奇跡、湖の上を歩く奇跡、風が止む奇跡を見ただけではなく、イエスから「エゴ　エイミー」という自己啓示を受けているのに、それでもなお心は開かないのです。
　しかしイエスは、それでも「乗り込んで」くださるお方です。心を閉ざし、人生の舟を漕ぎあぐねている者たちの人生に乗り込んでくださるのです。心を閉ざす者に対して、イエスの方は思いっきり心を開いて「エゴ　エイミー」と、ご自身のすべてを開示してくださるのです。そして、そこにも御業を行ってくださるのです。